京都帝國大學經濟學部內 東亞經濟研究所

年四回（二月、五月、九月、十二月）發行

東亞經濟論叢

第貳卷 第壹號

昭和十七年三月

特輯 南方經濟號

南方經濟の基本問題……經濟學博士 谷口吉彦
最近佛領印度支那幣制に於ける二つの改革……經濟學博士 松岡孝兒
比島資源價値の進展……經濟學士 淺香末起
ビルマの資源と産業と貿易……大場忠
インドの農産資源……文學士 岡崎三郎
濠洲經濟事情……宮崎亮
農業投資植民地としての蘭領インド……經濟學士 北博
印度支那におけるフランスの經濟政策……經濟學士 河野健二
日本經濟と南洋貿易……經濟學士 松井清
南方纖維原料の生産について……經濟學士 岡部利良
南方ゴム資源と其の對策……經濟學博士 谷口吉彦
南方資源論……經濟學博士 蜷川虎三
附錄 南方文獻目錄

發賣 有斐閣書肆

（轉載）

第二卷　一八四　第一號　一八四

農業投資植民地としての蘭領インド

北　博

序
第一章　農業國としての蘭領印度
　第一節　二、三の指標
　第二節　自然的要因
　第三節　技術的要因
第二章　國際投資植民地としての蘭領印度
　第一節　農　業
　第二節　鑛　業
跋
資　料

序

蘭領インドを具體的に認識するためにはいふまでもなく蘭印社會の內部構造を把握することが必要である。われわれはまづ尋ねなければならない。汎くインドネシアに散布するインドネシア社會は人類史のどのやうな發展段階を現すのであらうか？世界史の有機的な一環となつて以來、それはどのやうな外部的影響と內部的發展を閲

したであらうか？

しかしながら、抑もいつたいかゝる認識が何故必要とされるのであるか。

日本は、いま、その生活圏の確立のために熱帯資源の確保が必要であるとされる。ところでこれら熱帯資源は無人島に放置されてある寶ではなく、その上に、或はその内部に、形成されてゐるインドネシア社會の社會的生産物なのであり、このインドネシア社會を通じてのみ〃資源〃はわれわれと關係づけられるのである。そして社會史の現段階が、もはや古き單純なる掠奪の手段を揚棄し去つてしまつてゐるとすれば、〃資源〃の開發獲得がインドネシア社會の發展の方向と一致する限り可能であり有效であることは見易い道理であらう。インドネシア社會とのあらゆる側面における交渉がもはや不可避的な段階にまで到達してゐるとすれば、現在最も必要とされまだ最も欠除してゐるものは、このインドネシア社會そのものに關する認識なのである。あたかも支那社會の内的構造に關する夫が大陸政策の基礎をなす認識であらねばならぬやうに。

しかしインドネシア社會の統一的認識は恐らく甚だ困難である。蘭領インドとして概括されるインドネシア地域はその名の如く多くの島々から構成されており、經濟的、文化的發達は島により又その島内の場所により千差萬別だからである。少くとも政治、經濟、文化の中心であり全蘭印人口の七〇パーセントが集中するジヤワ（及マヅラ）と外領との差別は第一に認識されなければならぬ。しかしこのジヤワ社會そのものも、その構成單位である村落 desa の性格についていまだ明確な規定が與へられてゐない。だがこのことの明確な認識なくしてはインドネシア（乃至ジヤワ）社會の内的構成に關する科學的分析は基本的には一歩も進みえないのである。現段階

にまで到達せるインドネシア社會の歴史的認識につき、われわれは經濟學のみならず民俗學、言語學、文獻學等にまで到る各種人文科學の共同研究により速かな成果の得られんことを切望するものである。

本稿は蘭領インドの資源と貿易につき概括的な説明をすべく求められたのであるが、何分時日の餘裕もなく、又當領の資源については最近邦文にでも各種の優れた紹介がなされており、こゝに粗雜な反復を試みることを避け、主として蘭印（ジャワを中心とする）農業の前提條件とその植民地的性格とを明かにすることに重きをおいた。

（註）最新のものから列擧すれば主要なもののみでも次の如くである。

東亞經濟要覽（昭和十七年版）の中蘭印の部――東亞經濟懇談會調査部編

「東亞共榮圏と纖維産業」（紡績聯合會編）所載「蘭印植民地の性格と經濟」――守屋典郎

蘭印經濟概觀（昭和十五年度）――南洋協會

南洋年鑑第三回版（昭和十二年）――臺灣總督府編

蘭領東印度編（南洋叢書の中）――滿鐵東亞經濟調査局

第一章　農業國としての蘭領印度

第一節　二、三の指標

蘭領インドは農業國であり農業投資植民地である。このことは都市對農村人口比率、職業人口構成、産業別投資額、貿易構成等に一瞥を與へるだけで充分理解されるであらう。

「一九三〇年國勢調査」第八部に掲げるところでは、都市（シティ）總人口は四、五四一、五一九であり、これは總人口六〇、七二七、二三三の七・五％弱にすぎず、もし二萬以上の都市（シティ）に限定するとすれば此の比率は五・四％强にま

で弱ある。即第一表の如くである。

第一表　都市人口（一九三〇年）

	十萬以上	五萬－十萬	二萬－五萬	二萬以下	地方人口	都市人口割合
ジヤワ及マヅラ	1561434	379606	850362	757701	38169261	8.5％
スマトラ	108145	128638	47241	245998	7724821	6.4
其他外領	—	150553	102583	209258	10291632	4.3
蘭印	1669579	658797	1000186	1212957	56185714	7.5

更に全人口六千萬餘のうち農業その他牧畜漁業等原料生産部門に從事する人口はヨーロッパ人、インドネシア人、東洋外國人の各種別を通じて一九三〇年の調査によれば一、四三六萬餘人を算し、これは全職業人口二、〇八七萬餘の六八％以上に達し、總人口の二三％强を占める（第二表）。

第二表　職業人口構成（一九三〇年）

	原料生産	工業	交通	商業	自由業	公共機關	其他	全職業人口	總人口
ヨーロッパ人	18800	4676	10985	11415	11290	20731	7424	85321	240162
インドネシア人	14193158	2105129	290740	1090868	150227	491911	1957609	20279642	59138067
支那人	144888	93988	12754	171979	7161	3039	36126	469935	1190014
其他東洋外國人	7000	5058	1712	19054	842	495	1991	36152	114637
計	14363846	2208851	316191	1293316	169520	516176	2003150	20871050	60682880

出所　Indisch Uerslag 1940, p. 175—8 Econ. and soc. condition of the population ヨリ作成。

（註）1. 調査ニ當ツテ a simple enumeration ノ行ハレタ地方デ除外サレタ44353人ヲ合シテ1930年ノ總人口ハ 60727233 人デアル。尙 1940 年ノ推定人口ハ毎年 1.5％ ノ增加アルモノトシテ約 7000 萬人ト見積ラレテヰル。

（註）2. 原料生産部門人口ノ内部構成ハ人種別ニヨツテ多少相異ス。インドネシア人ノ夫ハ農業，砂糖栽培（エステートノ使用者），其他農園勞働者，牧畜，漁業ノ五項目ニ分レテオリ鑛業ノ項目ガナイ。反之他人種ノ夫ニハ石油，其他鑛業等ノ項目ガ存在スル。勿論インドネシア人ノ鑛業從業者ガヰナイワケデハナイ。

次に農業投資額は一九二九年末において二十億盾以上と見積られ、各種事業總投資額三四億餘盾の六〇%以上を占めた（第三表）。

最後にその貿易構成を檢するならば、輸出貿易額中農產物の占める割合は金額において最近每年六五%以上であり、鑛產物の夫は二七%餘り、爾餘の製品は數パーセントにすぎない（第四表）。

第三表　事業投資

	投資額（百萬盾）	%
農業投資	2100	61.26
鑛業會社ノ拂込資本金	430	12.54
鐵道會社ノ拂込資本金	826	24.10
船舶會社ノ拂込資本金	39	1.14
其他ノ商業，保險，倉庫會社ノ拂込資本金	33	0.96
以上計	3428	100
右會社ノ社債，借入金及個人事業ノ資本金	500	
總計	3928	

出所　南洋年鑑參照。
註　農業投資ハ一ヘクター當リノ資本價値ニ栽培面積ヲ乘ゼルモノ。

第四表　輸出構成

	百萬盾			%		
	農產物	鑛產物	其他	農產物	鑛產物	其他
1928	1237	242	97	78.5	15.4	6.1
1929	1078	264	101	74.7	18.3	7.0
1930	833	253	21	72.0	21.9	6.1
1931	507	188	52	67.9	25.2	6.9
1932	385	120	36	71.2	22.2	6.6
1933	306	130	32	65.4	27.8	6.8
1934	326	135	26	66.9	27.7	5.4
1935	294	126	26	65.9	28.3	5.8
1936	362	147	29	67.3	27.3	5.4
1937	660	258	33	69.4	27.1	3.5
1938	426	203	29	64.7	30.9	4.4
1939	495	223	28	66.4	29.9	3.7
1940	593	252	28	67.9	28.9	3.2

出所　Economisch Weekblad 1941, p. 893 (30. Mei).

輸入においては、いま主要輸入品目を五〇に類別した統計表を見るに、金額においてつねに第一位を占めるものは衣類たる木綿製品であり、最近三ヶ年を見れば本項輸入金額は總輸入金額の夫々一四・一四%（一九三八年）、一四・九六%（一九三九年）、一五・一四%（一九四〇年）である。以下の順位は年毎に多少移動はあるが第二位及第三位は鐵及鋼製品或は機械、器具類のつねに占めるところである。すなはち鐵及鋼並に同製品の割合は夫々八・八六%（一九三八年）、九・二四%（一九三九年）及一二・三四%（一九四〇年）であり、機械器具類の夫は一一・九七%（一九三八年）、一〇・三一%（一九三九年）及八%（一九四〇年）である。これら以外の輸入品目は急激にその比重を減じており、上掲三者だけですでに全輸入額の三五%内外を占める事實は、當領工業がそのあらゆる分野において未發乃至皆無に近い事情を現す。

いま輸出入品を完製品と未完製品とに分つ次表を見るならばこのことは一層明瞭となるであらう。

第五表　輸出入構成

輸入

	1937				1936				1935			
	1000kg	%	1000f	%	1000kg	%	1000f	%	1000kg	%	1000f	%
動物	215	0.01	125	0.02	226	0.01	138	0.05	265	0.02	135	0.05
食料飲料	466852	23.39	69126	13.40	490651	30.49	5970	19.13	650955	39.57	62054	22.33
原料半製品	592954	29.72	28555	5.53	490936	30.51	17684	6.15	417644	25.39	14956	5.38
完製品	935662	46.88	400521	77.63	627505	38.99	214062	74.49	576012	35.02	199353	71.74
金銀	97	—	17634	3.42	8	—	513	0.18	5	—	1381	0.50
計	1995780	100	515961	100	1609326	100	287367	100	1644881	100	277879	100

輸　出

	1937				1936				1935			
	1000kg	%	1000f	%	1000kg	%	1000f	%	1000kg	%	1000f	%
動物	17484	0.15	2332	0.24	12894	0.13	1577	0.28	7836	0.08	1004	0.22
食料飲料	2378405	20.52	203798	21.11	1926299	19.44	153467	27.48	1766439	18.58	135898	29.47
原料半製品	8853471	76.40	715165	74.10	7703197	77.73	365672	65.48	7481537	78.68	295275	64.04
完製品	339743	2.93	31720	3.29	267660	2.70	18529	3.32	253006	2.66	15269	3.31
金銀	60	—	12193	1.26	200	—	19200	3.44	162	—	13649	2.76
計	11589163	100	965208	100	9910250	100	558445	100	9508980	100	461095	100

出所　貿易年報，1937.

（註）1. 重量ハ總量。　2. 分類ノ基準及各項該當品目ハ不明　3. 1938年以降ハ貿易年報ニ記載ナク不明。

第二節　自然的要因

蘭領インドをして農業社會たらしめ乃至はそれに留らしめてゐる要因はなにか？　この問ひに答へることは容易でない。まづ第一に當該社會の著しい後進性を擧げなければならないが、この後進性は二重三重の歴史的原因によるものである。インドネシアに今何殘存する前文明社會は何故他の諸大陸の進歩の背後にとり殘されたのか？　さらに久しきに亘る封建（？）時代の停滯的發展の秘密は如何？　根本的にはこれらの諸問題が解決されなければならぬ。然る後所歐資本の侵入が當該社會に與へた影響、その支配政策が省みられねばならない。

いま、これらのことはことごとく本稿の範圍外にぞくする。こゝでは單に灌漑を中心とした技術的開發の努力と自然的要因とに限つて素描するにとゞめる。

蘭印が未だに農業國の域を脱しえないことの歴史的要因は上述の如く當該社會の停滯性とオランダの支配政策とにあつたのであるが、問題の積極面は逆に、蘭印をして今日の如き隆盛な農業國たらしめた要因如何といふ形で提出される。このことは第一にその自然的基礎、當該社會の據つて立つ自然的條件如何の問題であり、更にこの自然的條件を克服した技術的努力如何の問題である。

蘭領インドをして冠絶する農産地たらしめてゐる自然的條件を列擧すれば、

地質的條件

氣象的條件

雨量、　溫度、　氣壓、

等について説明されうるが、いまこれを増井氏「經濟上より見たる蘭領印度」を重に參照しつゝ略述すれば次の如くである（同書二二二頁―二三四頁）。

蘭領印度は地質學上大體次の三系統より成る。

一、古生紀の岩石

二、石灰岩及泥灰岩

三、第三紀及第四紀の火山噴出物

右のうち第一類はスマトラ、ボルネオ等で發見されるが、世界主要火山脈地帶の尤なるジャワにあつては第三類の新しい火山噴出物が最も多く、これら安山岩と玄武岩とを基礎とする土壤は殆んどすべての作物栽培に適

し、頻發する火山の爆發は土地の肥沃化によつてその損害以上の利益を齎すといはれる。

（註）バイテンゾルホ試驗所のモール博士によれば、蘭印各地の土壤に對しその最も好適する植物は次の如くである。

火山灰質土壤（低地）　甘蔗、煙草、落花生、甘藷、キヤツサバ、シザル麻、胡椒、カカオ、カポツク、果樹、ゴム、森林

火山灰質土壤（高地）　野菜、馬鈴薯、規那、茶、コーヒー、森林

火山灰質土壤（低地及高地）　米、バナナ、椰子、油椰子

石灰岩及泥灰岩より生成せる土壤　米、玉蜀黍、チーク、森林

古生紀の岩石より生成せる土壤　胡椒、檳榔樹、籐、森林

次に氣象的條件は氣溫、雨量、溫度、風、日光等により左右されるが、蘭領インドの氣候の特徴としては次の如き諸點が擧げられる。

一、高溫且溫差極小

二、雨　量　大

三、濕　度　大

四、季節風、風力弱し

五、日光の直射強力

（註）第一については「蘭領東印度編」十頁の表中に悉されてゐり、第二、第三も同樣、詳細は同書によつて知りうる。

右の諸點のうち二、三、四の諸項は、濠洲及アジア大陸並に太平洋及印度洋の中間に位置することによつてこれらの地理的環境に支配される。氣溫は年中殆んど變化を見ないが、季節風の方向と濕度との關係上、雨季と乾季とに大別される。雨季は大體十一月（平均十一月十日）から翌年四月（平均四月五日）まで、乾季は爾餘の期間。

雨季は濠洲の夏であつて氣壓低く、北半球は反之溫度低下し高氣壓を生ずる。故にアジア大陸の高氣壓は濠洲に向つて流れ、ジヤワは西北風（正確には偏北西風）となる。乾期には逆に北半球は夏、濠洲は冬となり、ジヤワは東南風（正確には偏東南風）である。このモンスーンの轉換が降雨に及ぼす影響は次の如くである。即ち濠洲の夏、ジヤワにおける西北モンスーンの時季は季節風と南半球の貿易風とは相反する方向をとるが故に、雨種の風が錯綜して上昇の傾向あり、冷却して雨となること多く、反之、アジア大陸の夏、ジヤワにおける東南モンスーンの時季には濠洲方面からのこの季節風は極度に乾燥してゐる上、貿易風と同一方向にあるため錯綜せず下降の傾向あり、爲に溫められて乾燥する。故にジヤワでは西北モンスーンの時は常に雨季となり、東南モンスーンの時は常に乾季となる。

赤道直下のボルネオ、スマトラ等の大部分はマレー半島と同じく右の様な季節風の明確な區別はなく、一年を通じて多濕であり、豪雨多く常雨帶をなし、且風力も相減殺されて弱くなり謂ゆる無風帶をなす。

雨量は「蘭領東印度篇」十二頁の表によつて知られる如く、最低五百ミリから最高六千ミリに達し、各地を通じて潤澤であり、植物の生育繁茂に最適である。ジヤワにあつては東海岸及北岸の低地は一千ミリから二千ミリ內外を普通とし、山地にあつては三千ミリから五千ミリの間を上下する。雨量はしかしながらモンスーン及山脈其他の關係から地方的に複雜な變化をなすが、しかし同一地方においては一年內における雨量の配分は整然たる法則によつて支配される。從つて地方によつて雨季と乾季との區別について明不明を生ずる。ジヤワにあつては東部及中部の平地は兩者の區別が截然としており、乾期の五、六ケ月間は殆んど降雨を見ない（これは甘蔗栽培が本

地方にのみ繁榮しうる優越な條件である)。反之、西部ジャワ及山地は乾期と雖も多少の降雨を見る。注意すべきは栽培農業上からは一年の積算量の多少よりも、その雨量の配分が問題なのであつて、單純に濕潤であるよりもむしろ乾燥することが重要なのである。水は灌漑技術の整備によつて任意に供給調節しうるから。

(註) 雨量の配分が重要であることは、蘭印農業の各研究者が、雨期における數週間(ミューレンによれば十二日間)の降雨の中絶は以て蘭印農業を破滅せしめるに足ると力說してゐるところを見ても充分理解される。この逆も眞であり、此の法則の實例は糖業において典型的に現はれるところ。

第三節　技術的要因

ジャワ人は生れながらの米作りであるとしても、ジャワの土地そのものが本來完全な耕作地であつたのではない。紀元後數世紀に侵入したヒンヅー人の文獻に、既に原住民の設けた灌漑施設のことが述べられてゐるといふ。歷史の遡りうる限り遠い昔から土地改良のための營々たる努力が試みられて來てゐるのであり、かくてジャワは古代から米產國としてその名を知られてゐた。しかしジャワ人の灌漑施設はその巧緻さに拘らず、材料の粗惡と技術の拙劣さとのため、前世紀の中頃には潰滅しかけてゐたといはれる(それは勿論數世紀に渡るオランダの掠奪が原住民社會の荒廢を齎したことにもよるであらう)。一八七〇年强制栽培制度の撤廢にともなふ私人經營の發展は近代的技術による灌漑設備の導入を必要ならしめ、疲弊したジャワの土地にいさゝか活を入れる機緣を與へた。

前述の如く全人口の七〇パーセントがジャワに集中し、その密度も一九三〇年には一平方粁當りスマトラの一七人强、ボルネオの四人强、大東地方の一一人强(外領平均一〇、七三人)に對しジャワ及マヅラの夫は三一五人

強に達する（一九四〇年においては推定人口七千萬、うちジャワ及マヅラ四千八百萬、外領二千二百萬とすればその密度はジャワ及マヅラ三六四人、外領一二・四人となる）。しかもジャワが一八三〇年のジャワ戰爭終了以來、直接統一的な支配の下にあつたのに對し、他の外領諸地方がオランダの强力な統治の下に編入を了したのは漸く今世紀に入つてからのことにすぎぬ。從つて西歐的技術の導入による開拓、その一つとしての灌漑活動が從來殆んどジャワに限られてゐたとしても不思議ではない。

第六表　灌漑設備

名稱	所在地(主要州)	面積ha.
チウヂュン	バンタム	31800
チサダン	バタヴイア	40500
チタルム	バタヴイア	70300
チマタク	チエリボン	92500
プマリ	ペカロンガン	31200
スラヂウ	バンユマス	19900
シドアルジョ	スラバヤ	34000
バルウ	プスキ	24800
ワイスカムポン	ラムポン(スマトラ)	42600
サダン	セレベス	63900

出所　The Netherlands Indies (Bulletin of the Colonial Institute Amsterdam) Vo . 3. No. 3—4 p. 153.

さて最初の近代的な灌漑設備は、前世紀の中頃築造されたシドアルヂョ・デルタ（スラバヤ附近）の灌漑改良のためのレンコン堰堤であつたが、このデルタ内の灌漑、排水設備の科學的改良は今世紀に入るまでは完成しなかつた。技術學的原理に基いた完全な灌漑設備の建設は、八十年代に入つて漸く緒につき、まづスラジウの灌漑地區が一八八八年完成した。次いでブランタス、スラン、プカレンーサムピアン、プマリーチョマル、チマタク等の灌漑地區が夫々一八九二、一八九二、一九〇七、一九〇八、一九一〇の各年に建設された。これら灌漑地區の規模の一端を示せば次表の如くである。

かくて一九三九年末までに科學的に灌漑された水田は一、二三三、九一四ヘクターに上つた。このほか小規模な土人の灌漑設備は夥しく存在しており、その給水總面積は一五〇萬ヘクターに及ぶといはれる。いまジヤワにおける土地利用情態を檢ずるならばこれらの數字の重要性は直ちに理解されるであらう。

本表によつて知られることは、ジヤワにおける可耕地は約九百萬ヘクターであり全島面積の六十數パーセントを占めることである（エステート所屬面積の大部分は可耕地であると思はれる。詳しくは Indisch Verslag 一九四〇、二五五頁以下を見よ）。この可耕地は更に水田と乾田とに分れ、その各々の面積は一九三九年において水田三三七萬七千ヘクター、乾田四五二萬三千ヘクターである（邦譯「蘭印統計書」三六頁）。從つて科學的な從つて永久的な施設をもつ灌漑面積は全水田の三分の一以上を占め、これに土人の手になる夫を合すれば二七〇萬ヘクターを超え、實に全水田の八〇パーセントに及ぶことゝなる。ジヤワ土壤の豐饒は天與の肥沃さだけによつて齎らされたものではないことが知られるであらう。この灌漑設備の建設及維持修繕のため、政府は

第七表　ジヤワ，マヅラの土地使用（一九三九年）

種　類	面積（1000 ha.）	%
1 インドネシア人農業ト漁業		
a インドネシア人農業地	7881.6*	59.6
b 鹽水漁業地	69.3	0.5
計	7950.9	60.2
2 エステート	1005.7**	7.6
3 政府森林	3090.9	23.3
4 其他土地	1169.9	8.9
總計	13217.4	100

出所　Indisch Verslag 1940.
(註 *)一時的にエステートへ讓られた面積（135.7千ヘクター）を加ふれば 8017.3 千ヘクター
(註**)インドネシアへ讓渡した 273.1 千ヘクターを加ふれば 1278.8 千ヘクター
尙外領にをけるエステートの租借面積ば
スマトラ—1447125ha.　ボルネオ—68209ha.
大東省—127719ha.　計—1643053ha.

毎年夫々數百萬盾を支出しつゝある。科學的灌漑は實に數倍の增產を結果するからである。

ジャワ開發のための努力は勿論灌漑活動だけに止らない。道路の建設、鐵道の敷設等の交通問題があり、又たゆみなき農事研究の努力がある。一九世紀初頭(一八〇八—一八一一)ダンデルスの强制勞働、更に一八三〇年以來の栽培制度時代を通じて爲された道路の開發擴張は、本島をして東洋一の整備せる道路網の所有者たらしめた。又エステートの輸出農作物の多くは海外からの移植によるものであり、數十年に亘るこれらの品種改良の努力によつて今日の隆盛が招來されたのである。東印度會社の批政によつて困憊の極にあつたこの土地が、一世紀の後に「植民地世界の精華」と呼ばれるにいたらうとはラッフルズと雖も豫想しえなかつたであらう。

第二章　國際投資市場としての蘭領印度

第一節　農　業

オランダは近世資本主義發展の尖端を切つたが、商業—高利貸資本として早く寄生化し、强力な產業資本の展開を見なかつた事情は、その廣大な植民地をして永く政府の獨占の下に置かしめたと同時に、外國資本の壓迫の下に植民地の政治的支配を維持すべく、これを國際的投資市場として開放しなければならなかつた理由でもある。すなはち、東印度會社(一六〇二—一七九八年)の專制に次ぐ强制栽培制度(一八三〇—一八七〇年)下の獨占機構が除々に打破された一九世紀後半以來、國際資本は滔々として流入し、古き專制と獨占とに代つて私人經營による自由なアウスボイツンクの時代が登場する。この私人經營はしかしインドネシア社會にとつては全く寄生的

な存在にすぎず、住民の需要とは無關係に、國際市場のための輸出農作物のみを栽培し、超過利潤の獲得のみを目的とする。このエステートと原始的な技術の下に自然經營の枠を出でず、謂はばその餘剰を輸出するにすぎない土人農業とは截然と區別されてゐる。土人農業はエステートへの耕地分與と租稅及負債の過重の下に餘儀なくされる縮少再生產によつて食料の自給すらおぼつかない（輸入品中可なりの分量を示す食料品（第五表）のうち最大のものはインドネシアンの食料たる米であり、その他小麥粉、魚類等が目立つ）。かくて蘭印農業の繁榮とは全くエステートの繁榮に外ならない。以下具體的に這般の事情を見よう。

いま蘭印物產の世界輸出（乃至生產）における比重を見るならば次表の如くである。

第八表　農產物ノ世界的地位（一九三九年）

	キナ (kg.ton)	カポック (kg.ton)	胡椒 (kg.ton)	ゴム (1000kg.t.)	古々椰子物產 (1000kg.t.)	アゲーヴ (1000kg.t.)	油椰子物產 (1000kg.t.)	茶 (1000kg.t.)
世界輸出	13879	29955	80672	1021	2004	332	1126	397
蘭印	12619	21450	69672	379	544	109	274	74
%	91	72	86	37	27	33	24	19
	(1929—94)	(1930—79)	(1936—92)	(1937—38)	(1932—35)	(1933—30)	(同　上)	(1932—19)

出所　Landbouwexportgewassen 1939.

（註）1.「キナ」ハ生產額。　2. 括弧內ハ過去十年ニ於テ最大ノ比重ヲ示セル年度及%。

これら農產物輸出のうちキナ、油椰子物產及アゲーヴ纖維はエステートが獨占し茶においては八三%、ゴムでは五一%を分つ。反之、殘りの三者は土人の割合が壓倒的であり、エステートはカポックの一〇%、古々椰子物

産の大部を占めるにすぎず、胡椒は土人の獨占である（一九三九年）。

しかしながら蘭印自身の輸出貿易における重要性からみるならばわれわれは別の順列を掲げなければならぬ。そこにおいては土人物産の地位は遙に後退しエステート物産が全面的に進出するからである。すなはち最近數年の輸出における主要農産物の地位を見るに、いま假りに輸出金額において十位以内にあるものを檢出するならば次の如くである。

第九表　重要輸出品

	1938			1939			1940		
	品目	千盾	%(對全輸出額)	品目	千盾	%	品目	千盾	%
1	石油	161604	24.57	ゴム	196535	26.35	ゴム	332274	37.65
2	ゴム	135384	20.58	石油	155380	20.83	石油	169622	19.22
3	茶	56243	8.55	砂糖	76983	10.32	錫・錫鑛	81618	9.25
4	砂糖	44690	6.79	錫・錫鑛	58848	7.89	砂糖	52491	5.95
5	タバコ	38849	5.91	茶	57089	7.65	茶	48905	5.54
6	コプラ	38313	5.83	タバコ	26940	3.61	タバコ	38516	4.37
7	錫・錫鑛	33442	5.08	コプラ	25270	3.39	キナ	27070	3.07
8	油椰子油	16527	2.51	油椰子油	15774	2.11	タピオカ	13244	1.50
9	コーヒー	13708	2.08	コーヒー	11856	1.59	コプラ	12587	1.43
10	キナ皮・キニーネ	11854	1.80	キナ皮・キニーネ	11550	1.55	硬質纖維	10281	1.17

出所　貿易年報，經濟週報。

これらの主要農産物のうち、本來土着の物産であるコプラやタピオカ製品を除き、爾餘の物産におけるエステートの割合を見るならば次の如くである。すなはちキナ、油椰子及硬質纖維がエステートの獨占であるほか、砂糖において九九%、茶において八二%、タバコにおいて八二%、ゴム及コーヒーにおいて五一%を夫々占める（一九三九年）。かくして全體農産物輸出におけるエステート對土人物産の比重は次の如く變遷する（第十表は既出第四表の農産物の内容であり、パーセントは全輸出額に對するそれ。第十一表は兩者相互のそれ）

第十表　農産物輸出額

年度	百萬盾			%		
	農園	土人	計	農園	土人	計
1928	808	429	1237	51.3	27.2	78.5
1929	685	393	1078	47.5	27.2	74.7
1930	573	260	833	49.5	22.5	72.0
1931	342	165	507	45.8	22.1	67.9
1932	247	138	385	45.7	25.5	71.2
1933	181	125	306	38.7	26.7	65.4
1934	211	115	326	43.3	23.6	66.9
1935	188	106	294	42.1	23.8	65.9
1936	229	133	362	42.6	24.7	67.3
1937	358	302	660	37.6	31.8	69.4
1938	257	169	426	39.0	25.7	64.7
1939	310	185	495	41.6	24.8	66.4
1940	368	225	593	42.1	25.8	67.9

出所　第四表ニ同ジ。

第十一表

年度	價格		重量	
	農園	土人	農園	土人
1927	69	31	73	27
1928	65	35	67	33
1929	64	36	70	30
1930	69	31	75	25
1931	67	33	66	34
1932	64	36	64	36
1933	59	41	61	39
1934	65	35	63	37
1935	64	36	61	39
1936	63	37	50	50
1937	54	46	54	46
1938	60	40	57	43
1399	63	37	63	37

出所　Lanpbouwexportgewassen 1939.

右の場合において、われわれは人口及耕地面積における兩者の割合を想起せねばならぬ。人口については喋々を要しないであらう。數千萬のインドネシア人に對しエステートの數はジャワにおいて一一八一、外領において一二一九、合計二四〇〇（一九四〇年）にすぎない。耕地に關してはジャワ（及マヅラ）だけについてみれば第七表によつて知る如く、インドネシア人農耕地はエステートの夫に約七倍するが、問題は一人當りの耕地面積である。ジャワにおけるインドネシア人一人當りの可耕地面積は〇、一九ヘクターにすぎないに反し、エステート一箇當りの所有地及租借地は約一千ヘクター（植付面積だけを見ても約五百ヘクター）、全く比較にならない。單にこれだけの事實から見ても年々數億盾に上る貿易のバランスが誰の手に流れるものであるかは明白であらう。しかも事實は、國際貿易機構が全くインドネシア人から遮斷されてゐるのであり、貿易業、卸賣業、仲介業等はすべてヨーロッパ人及支那人のカテゴリーに屬する人種に獨占され、さなきだに輸出入商品の鋏狀差價格に惱む土人經濟はこれら中間業者の二重の搾取によつて益々窮地に追ひ込まれる。かくて赤字克服否回避のために土人經濟はます〳〵古い共同體内へ後退せざるをえず、共同體成員の共同の犠牲においていくらかでも打擊を緩和させるために、オランダの植民政策は「土人の舊慣を尊重して」未分化な村落社會をことさら狹隘な天地に跼蹐せしめつゝ放任したのである。「貧しきが故に富む」―蘭領インドもまたこの眞理の例に洩れるものではない。

最後に參考までに各國の農業投資額を掲げる。投資額は算出の方法により又人々により區々として一致を見ず、近年におけるものも不明であるが、左は蘭印政府が一九二九年末、各種栽培物の植付面積及一ヘクター當りの資本價値を基礎として算出せるものである。*)

*) 南洋年鑑。

第十二表

オランダ	一五三六一三〇千盾	日本	一九五四〇千盾
イギリス	二七八〇五八〃	スペイン	五二一三〃
アメリカ	五三〇三五〃	イタリー	二一九四〃
フランス、ベルギー	一一一八二八〃	其他	四一〇九七〃
ドイツ	一七九〇五〃		

第二節　鑛業

鑛業はオランダ資本及これと融合したイギリス、アメリカ資本の殆んど獨占するところであり、その獨占機構は農業に比して遙に徹底的である。鑛業投資は政府發表によれば一八三〇年末において拂込資本の外、社債、借入金等を含み總額約六億盾であつた。その内容は次の如くである。*)

第十三表　鑛業投資（千盾）

國名	石油	石炭	錫	金銀	其他	計
オランダ	二四八四八〇	一一四七〇	一七五〇〇	一四二二〇	一七八一二	三〇九四八二
イギリス	一二三六〇〇	—	—	六〇〇	—	一二四二〇〇
アメリカ	一一〇〇〇〇	—	—	—	—	一一〇〇〇〇
支那	—	—	—	—	八五〇	八五〇
日本	一八〇	—	—	—	—	一八〇
民間計	四八二二六〇	一一四七〇	一七五〇〇	一四八二〇	一八六六二	五四四七一二
政府	五〇〇〇	三一二七四	一六五七五	五五六九	—	五六四一八
總計	四八七二六〇	四二七四四	三七〇七五	二〇三八九	一八六六二	六〇一一三〇

*) 南洋年鑑。

（註）日本の投資は實際は數百萬盾に上る筈。

右によつて明かなやうに、英、米の資本は專ら石油に向けられており、オランダもまた主力をこれに注いでゐる。列强がいかにこの重要な戰略資源に力を集中したか、いかに激烈な「石油戰」を演じたかは周知の如くである。蘭印石油の世界的地位は一九四〇年において世界生産の二・八％を占めたにすぎないが、本資源の世界的偏在（註）のために、また東亞及西太平洋における唯一の豐富な油田地帶である點において、太平洋問題に關係ある國家にとつて決定的な意義をもつ。

（註）同年USAは六三％、ソ聯は一〇％を占め、蘭印はヴエネズエラ一八・六％、イラン一三・七％についで第五位。

世界において、また蘭印において、石油業ほど順調にまた急激に發展した産業は少ないであらう。蘭印の産油量を顧るならば、一八九三年には僅か六〇萬バレル（一バレルの原油は平均〇・一三七キログラムトン）であつたものが、一八九五年には百萬バレルを超え、第一次世界大戰を轉期として一九〇八年には一千萬バレルに飛躍した。以後次第に增加して一九三九年には六一二九三〇〇〇バレル、トンで言へば約七九五萬トンに達したのである。その輸出高も一九〇〇年には重量において全蘭印輸出高の七・五％、價格において一・八％にすぎなかつたものが、最近に至つては重量において全輸出高の半ばを超えるに至り、一九三八年には約六百萬トン、五五・二％に達した（一九三九年には六四二萬トン、五三・一％）。價格においても同年は第一位を占め約一億六千萬盾、全輸出額の二四・五％を專有した（第九表を見よ）。かくて石油製品はいまやゴムと並んで蘭印物産の王座を占めるに至つてゐる。

前述の如く本業は蘭、英、米資本の獨占するところであるが、いま各國の資本系統、會社別生産額等を見るならば第十四表の如くであり更に製品別及島嶼別産額を見るならば夫々第十五表及第十六表の如くである。

第十四表　石油會社別生産（一九四〇）

會社名	公稱資本	資本系統	生産額	%
Bataafsche Petroleum Maatschappij（バタフセ石油會社）	3億盾	英—40% 蘭—60%	4544255	57.2
Nederlandsthe Koloniale P. Mij.（オランダ拓殖石油會社）	2450萬盾	米（スタンダード）	2083402	26.2
Ned.-Indische Aardolie Mij.（蘭印石油會社）	1000萬盾	B.P.M.—50% 政府—50%	1306867	16.5
其他諸會社			4469	0.1
計			7938993	

出所　Economisch Weekblad 1941 p. 1016.
新亞細亞，昭和十五年六月，蘭領印度ノ燃料鑛物資源（鹽谷巖三）

第十五表　石油製品別産額（一九四〇年）

	kg.ton
ベンヂン	1910925
航空機用ベンヂン	366977
ホワイト・スピリツト	4604
燈油	1004177
殘滓，ソーラー油，デイーゼル油	2854149
潤滑油	33790
沈油	25483
パラフイン，ワス，セレシン	92390
アスフアルト	45989
其他	360938
損夫	130662
計	6830084
原油及燃料油トシテ直接輸出	938192
總計	7768276

出所　Economisch Weekblad 1941, p. 1016.
（註）本表總計ハ前掲第十四表ノ夫ヨリ170717瓲減少シテヰルガ理由不明。
尙製品別生産額ノ割合ハ毎年サシテ變化シナイ

次に世界生産額の二〇%を占める錫もまた當領屈指の資源であり近年とみにその重要性を加へてきたことは第九表によつても明かであらう。又この開發が外資を排しオランダ資本の獨占であることは第十三表によつて知られる。當領錫鑛の年最大生産可能量は四五千トンと云はれるが實際産出量は第十七表の如くである。

尙その他の重要鑛産物を一括して次に示す(第十八表)。いづれも鑛石であつて精製せるものではない。

第十六表　原油生産（一九四〇年）

ジヤワ及マヅラ	839495 kg.ton	10.6%
スマトラ	5208709	65.6
パレムバン	3077556	
ヂヤムビ	1210398	
スマトラ東海岸	156488	
アチエ	764267	
ボルネオ	1793148	22.6
東部ボルネオ	983899	
タラカン	809249	
モルツケン	97641	1.2
計	7938993	100

出所　同　上。

第十七表　錫生産（1000kg.）

	1940年	1939年	1938年	1937年
バンカ	24180	17020	15563	23455
ビリトン	17294	9999	10492	13928
シンケプ	2402	1308	1662	2363
土人採掘	10	15	17	14
計	43886	28342	27734	39760

出所　Economisch Weekblad a. a. O.

第十八表　(kg.ton)

	1940年	1939年	1938年
石炭	2000680	1780632	1456647
ボーキサイド	275221	230668	245354
ニツケル	55540	23535	20000
マンガン	11897	12074	9687
燐	34085	18777	33113
硫黄	17252	17570	16242

出所　Econ. Wkbd. 1941.

蘭印と日、支、泰、比、馬來、佛印等共榮圏内諸國(註)との貿易關係は、從來蘭印の輸入において三一パーセントを占め、輸出においては九パーセント餘を吸收したにすぎない稀薄なものであり、殘餘の貿易額のうち英、米、蘭及その屬領地域からは輸入の五八パーセント餘を賴り、輸出の七八パーセントを仕向けてゐた。

（註）ヒリツピン、マレーへの輸出品は當該地域にて消費されるもののみ故こゝに加へた。反之、シンガポール、ペナン、香港は後者に加ふ。

大東亞戰爭の勃發によつてこれら諸國との關係を切斷され、海外市場から隔離された蘭印經濟は從來の繁榮に對して致命的な打擊を受けた。それは直接には農園及鑛山開發のための外國資本の蒙るものではあるが、インドネシア社會に對するその影響もまた看過できないであらう。現物交換がなほ日常經濟の少なからざる部分を占め、自然經濟の枠から拔けきらないインドネシア村落にとつて、ヨーロツパ人の資本による近代的經營機構の崩壞は、よしんば死活的問題ではないとしても、しかしたとへばエステートからの地代手得、農園及鑛山勞働者としての賃銀、各種輸出農產物の販賣等を重要な收入源泉としてゐたインドネシア人の少なからざる部分に對する打擊は、全インドネシア社會にとつて無視できない影響をもつであらう。尤も單に打擊に耐えるだけならばいまなほ共同體的性格をもつインドネシア村落は、日本の農村よりもなほ强靱な融通性をもつ。しかし大東亞戰爭の歷史的意義が、將來におけるインドネシア社會の向上と不可分の關係をもつものであるならば、國際投資植民地

として烙印された當領經濟の再編成は、インドネシア村落の封鎖性、その停滯性を打破する方向と一致しつゝ爲されねばならぬであらう。これは近い將來に起りうる最大至難而も最緊急の問題であらう。それにしても痛感されることはインドネシア社會の社會的構造、その歴史的特質等に關する研究の立ち遲れである。表面的な資源問題の域から脱して一刻も早くこの未開拓の分野に立ち入つた緊密周到な研究が進められんことを切望するのは筆者だけではないであらう。

參考せる資料、文獻

In isch Verslag 1940.

De Landbouwexportgewassen vau Ned-Indië in 1939.

Jaaroverzicht van den In-en Uitvoer van Ned-Indië 1939.

Economisch Weekblad.

The Netherlands Indies (Bulltin of the Colonial Institute Amsterdam).

南洋年鑑。

蘭領東印度（南洋叢書）。

蘭印統計書（Statistisch Zakboekje voor Ned. Indië 1940 ノ邦譯）。

經濟上より見たる蘭領印度（增井貞吉）。

石油讀本（宇井丑之助）。

新亞細亞。